

# 私の紙面批評

八戸学院大学学長

水野 眞佐夫



〈みずの・まさお〉 1 歴任。2006年から北海道大学大学院教育学研究教授を経て、今年4月から現職。専門は健康・スポーツ科学。日本体力医学会評議員、第80回国民スポーツ大会県準備委員

本年3月に八戸市民の一人となり、4月より現職を仰せつかった私にとって、本紙は地域に関する情報を得るための源泉である。地域に潜む課題を感度よく捉えることは、国際的な展開を視野に入れた問題解決に貢献できる「次世代人材」の育成を担う地域に根付く基幹大学において、極めて重要な役割である。

青森県では唯一、海の若人を育てる八戸水産高校の生徒49名が乗船した実習船「青森丸」が、国際航海実習のため9月5日八戸港を出航した（6日付朝刊）。実習生は、

## 9月掲載分 ハマの再発見から新時代へ

マグロを味わってみたいと思う市民は私だけであろうか？ ところが、実習で漁獲したメバチマグロは、八戸港に帰港する前に、神奈川県三浦市三崎港にて、全て水揚げされており、市民のもとへ届いているのは、ごくわずかである。2カ月以上にわたる航海実習に取り組んできた生徒の頑張り、母港での水揚げイベントにより在校生とともに地元八戸で学ぶ教育的取り組みは、多くの問題を抱えているとは言え（例えば、水揚げ用クレーン、冷凍保存、冷凍加工、解凍法、卸・小売連携など）、実現できない難題であるのだろうか？

市制施行90周年を迎えた八戸市は、海の恵みと豊さを「ハマ」から「陸」へと受け継いできているように私には見える。近年、地球温暖化が起因の一端と考えられるイカ・さばの水揚げ低迷が危惧されるとともに、海の豊かさや損なう海洋プラスチックごみが国際的・社会的な問題となってきた。海の恵みに変化が生じ、海の豊かさが損なわれつつあるこの時代に、ハマを再度見つめなおし、ハマの新たな未来に想いを馳せ深める機会となったのが「八水高生胸躍らせ、いざ大海原」の記事であった。

年2回、11月末と3月末に国際航海実習を終えて八戸港に帰港する海の若人を迎えて、冷凍マグロの水揚げとマグロフェスを開催して応援したいと奮い立つ八戸市民が一人でも増えることに期待を寄せている。